NAGANO ORGANIC AIR 2022
DOCUMENT BOOK

NAGANO ORGANIC AIR 2022
DOCUMENT BOOK

NAGANO ORGANIC AIR とは

「NAGANO ORGANIC AIR」は、様々なジャンルで活躍するアーティストが、長野県内の各地域に滞在し、創造活動を行うアーティスト・イン・レジデンス（AIR）の取組みです。公立文化施設や地域の文化芸術団体、教育委員会などがホストとなり、地域での創作のプロセスをコーディネートしながら、アーティストとの双方向的な協働を試みます。「ORGANIC＝有機的」をキーワードに、アーティストの創作意欲を刺激するローカルな営みとの出逢いにフォーカスした滞在制作を実施。2022年度は長野県内８郡市町村にて８組11名のアーティストが、各地の自然や風土、食や歴史文化を様々に反映した、地域色ゆたかな活動を展開しました。

例えば、栄村に滞在した行橋智彦さんは、村内に湧く泉質の異なる温泉と、野山の植物を採集し染物作品を制作、冬の雪の中で展示しました。また、小海町に滞在した音楽家の蓮沼執太さんは、地元中学生と協働して千曲川とその支流のフィールドレコーディングを行い、川の流れと海にまつわるサウンドインスタレーション作品の制作を行いました。他にも、諏訪の御柱祭や大町の若一王子祭りなどの祭事への立会いや、木曽踊りや新野の盆踊りなどの体験、八ヶ岳登山、伝統食作りなど、アーティストの滞在を通して「アート」と「地域」それぞれが持つ可能性がさまざまな形で立ち上がってきているのを感じることができました。

NAGANO ORGANIC AIR では、これからも長野県におけるアートの創造活動の可能性を育み、地域に有機的に広げ、持続的な環境づくりに繋げていきます。

「NAGANO ORGANIC AIR2022」
実施期間：2022年４月～2023年３月
実施場所：長野県栄村、長野市、小海町、安曇野市、大町市、木曽郡、茅野市、阿南町 ほか

主催：信州アーツカウンシル（一般財団法人長野県文化振興事業団）、長野県
　　令和四年度 文化庁 文化芸術創造拠点形成事業
企画制作：信州アーツカウンシル（一般財団法人長野県文化振興事業団）
　　［津村卓、峯村高広、宮本隆希、保谷有美、野村政之、伊藤羊子、佐久間圭子、藤澤智徳］
アシスタント・コーディネーター：一般社団法人シアター＆アーツうえだ（加藤亜弓、村上梓）、鈴木彩華、前田斜め、水橋絵美

【茅野地域】
主催：茅野市民館指定管理者 株式会社地域文化創造
共催：信州アーツカウンシル（一般財団法人長野県文化振興事業団）、長野県
助成：一般財団法人地域創造

【安曇野地域】
主催：安曇野市教育委員会、信州アーツカウンシル（一般財団法人長野県文化振興事業団）、長野県

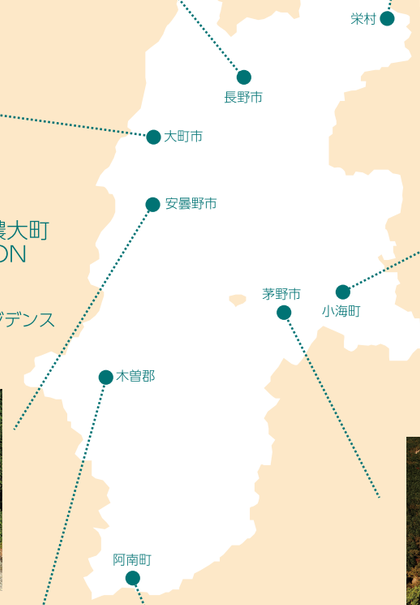
PROJECT

2022年度
実施プロジェクト

たまに集まるナガノなんでもバンド
ARTIST 額田大志
HOST R-DEPOT キャンププロジェクト

雪に染まる冬の支度
ARTIST 行橋智彦（旅する服屋さん メイドイン）
HOST 栄村公民館

ふしぎうぶすなレジデンシー@信濃大町
STRANGER THAN PHENOMENON
ARTIST 横山彰乃
HOST 信濃大町アーティスト・イン・レジデンス



Unseen Sea
ARTIST 蓮沼執太
HOST 小海町高原美術館

踊るからだでみつめる
安曇野のくらし
ARTIST ...1［アマリイチ］
HOST 安曇野市教育委員会

みちのちのダンススケープ
ARTIST 森下真樹、石川直樹
HOST 茅野市民館

木曽めぐるナンチャラホーイ
ARTIST 私道かぴ、舒達
HOST 木曽 AIR ネットワーク

短編演劇『新野物語』ツアー 2022
ARTIST 山田百次
HOST 新野だら実行委員会

【短期滞在研修プログラム 2022】
生きることとアートの呼吸
～Breathe New Life

nagano_air2022
naganoair2022
nagano_organic_air
http://noa.nagano.jp/
web サイト

滞在成果展の発表会場となった栄村小滝地区のかまくら内部にて。

雪に染まる冬の支度

冬、一面の雪に覆われる豪雪地帯であり、秘境・秋山郷など独特の環境と文化をもつ栄村に、大分・別府で天然染色「温泉染」を探究している「旅する服屋さんメイドイン」行橋智彦さんが滞在し、栄村の自然や人の営みに学びを得ながら活動しました。

滞在初回の８月は、栄村公民館長・樋口正幸さんの案内で夏の栄村全域をリサーチ。和山温泉、切明温泉、小赤沢温泉ほか、村内に複数ある異なる泉質の温泉場を巡るとともに、震災復興祈念館「絆」や歴史文化館「こらっせ」、栄村植物園を訪ね、風土や歴史を知り栄村への知識を深めました。

11月の滞在では、地元の方と晩秋の山中に分け入りユキツバキなど染に使う植物を採取したり、秋山郷で天然きのこや山菜など地の物にこだわった食や生活文化を体験しました。また、主な制作の拠点となった小滝地区での滞在中は、住民の方々と里山を一緒に歩いたり、集落の慣例となっている子ども達の朝の新聞配りに付き添ったりするなど、ご近所付き合いのような濃密な交流を重ねていきました。

雪が降り積もった２～３月の滞在で、こうした体験をもとに作品制作と展示を行いました。栄村で採集した植物と温泉を使って羊毛を様々な色に染め、きのこのオブジェを造形。この作業には栄小学校の児童や地域の大人の皆さんも参加しました。そして、雪でつくった大きな「かまくら」の中に、多種多様なきのこが生えるインスタレーション作品を創り上げ、冬の栄村ならではのユニークな成果展を開きました。

ARTIST 行橋智彦

旅する服屋さん メイドイン／温泉染研究所
2011年、東北に起こった大地震に反応して旅に出る。
足踏みミシンと染色道具を持って日本各地を巡り、その時その場所でモノやコトをつくる。
2016年から泉都、別府に根を張り、地下に流れる温泉の湯脈に想いを馳せながら日々お湯に浸かり、土地の色を探し求めて研究中。

HOST 栄村公民館

栄村は長野県最北端の地。土地面積は 270k㎡と広大で、人口1,669人(R4.4.1) が暮らしています。昔から新潟県との交流が深いことから、新潟県と長野県が入り混じる県境ならではの文化を有しています。長野県北部地震によって救出された民具や文書を収蔵・展示する施設として、平成 29 年８月に栄村歴史文化館「こらっせ」をオープン。栄村公民館が管理者となり、栄村らしさの追求や発信、暮らしの充実を目的に活動しています。

1

8月24日～25日
行橋さん滞在１回目

８月には行橋さんの１回目の滞在を実施。１泊２日の行程で、おもに震災復興祈念館・絆や村内の温泉をリサーチして回りました。夜は、栄村の小滝集落にある古民家を改装したゲストハウス「となり」に宿泊。栄村公民館長 樋口さんによる手料理を振る舞って頂きました。

2

11月10日～20日
行橋さん滞在２回目

11月には11日間の長期滞在を実施。小滝集落や秋山郷など滞在拠点を変えながら、次回の滞在制作に備え、村内の温泉・植物を採取して回りました。植物採取の際は、栄村公民館の協力で地元の方にアテンドして頂くなど、たくさんの交流が芽生えた滞在となりました。

3

11月15日
栄小学校交流授業

15日には栄小学校５年生との交流授業を実施。５年生が４年生の時から続けてきた栄村の温泉調査の発表を聞いたのち、行橋さんと一緒に、栄村の温泉と植物を使った染物体験を実施。温泉と植物によって仕上がりの色が大きく異なることに興味津々の様子でした。

4

2月20日～3月7日
行橋さん滞在３回目

雪がある時期に滞在したいという行橋さんの要望により、2月～3月に最後の滞在を実施。九州・大分県から車で栄村にやってきたという行橋さん。日本有数の豪雪地帯である栄村の積雪量に、滞在初日から驚きを隠せない様子でした。

5

2月22日・3月1日
きのこ作り WS

２月と３月にはそれぞれ１回ずつ住民向け WS を栄小学校にて開催。行橋さんが栄村の温泉や植物を使って染め上げたさまざまな色の羊の毛（フェルト）を使って、参加者それぞれがきのこ作りに挑戦。おもいおもいのきのこに仕上げていきました。

6

3月4日～5日
滞在成果発表展

滞在最後の週末となる４日・５日には、小滝地区にて成果発表展を実施。雪でかまくらを作り、その内部にフェルトのきのこを飾りつけました。また、かまくらの周りにはきのこ型の雪灯篭を作るなど、「雪」という素材を存分に活かした展示となりました。

滞在を終えて

ARTIST >>>

数年前に滞在したインドの極北、ヒマラヤ山脈を望む標高 5000m を超える辺境の地で遊牧民の老人の言葉を思い出した。
今までで１番幸せだった事は？の問いに対して彼は雪がたくさん降った年だと答えた。
雪がたくさん降り春に雪が溶け、大地に染み渡り、草がたくさん生え、羊や山羊がよく育ち、ミルクや羊毛は物資と交換して生活の支えとなる。
雪深い辺境地、栄村で山や人間や動物などの間でひっそり仕事をし続けているきのこ。山の色々を借りて僕なりの冬支度。（行橋智彦）

HOST >>>

小学５年生とのコラボや地域住民とのワークショップでは、行橋さんの陽気な雰囲気や、制作中のなんでも肯定的に受け入れる声がけに、参加者も自信を持って楽しく活動することができました。成果発表展では、外から見ると真っ白なかまくらですが、中に入ると湿った草木の香り漂う羊毛きのこの洞窟という別世界に圧巻。行橋さんとの出会いを通して、参加者・来場者に新たな感性や価値観の芽生えがあったのではないかと感じています。（栄村公民館　島崎佳美）

滞在の記録はこちら

たまに集まる ナガノなんでもバンド

総勢18名による大所帯ポップバンド「たまに葡萄」の初ライブの様子

長野市では中心市街地の空きビルをリノベーションした拠点「R-DEPOT」をベースに、新たな”まちづかい”を構想する「R-DEPOT キャンプププロジェクト」の皆さんがホストとなり、作曲家・演出家の額田大志さんが滞在制作を行いました。
7年に一度、本来であれば昨年行われるはずだった善光寺の御開帳が、新型コロナウイルスの影響で1年延期となったため、5,6月の滞在時はちょうど善光寺周辺が賑わう時期と重なりました。
額田さんは門前をリサーチして善光寺土産から着想を得たワークショップ『お土産を演奏する』を考案、R-DEPOTで実施し、長野の街で暮らす人たちとの交流を広げました。
また、額田さんは長野のインディーズ音楽シーンに関心を持ち、11月からライブハウス「ネオンホール」を活動場所とするバンドメンバーを公募。「音楽経験不問」「月に2~3回のリハーサル」など参加条件の敷居の低さもあって、看護師や大学生、フリーライターや音楽教室講師など、幅広い世代、様々な肩書の17名が集まり、額田さんとともに大所帯ポップバンド“たまに葡萄”を結成しました。メンバーが作詞・作曲したオリジナル曲を演奏し、2月にR-DEPOTにて1st Liveを開催。終演後には再演の声が多く寄せられるなど、大盛況のうちに終演しました。
音楽を共通言語に、様々な人達が出逢い、集い、場を作る。長野の街、コミュニティ、アートの新たな関わり方を探った1年となりました。

ARTIST 額田大志

作曲家、演出家。1992年東京都出身。東京藝術大学在学中にコンテンポラリーポップバンド『東京塩麹』結成。FUJI ROCK FESTIVALの出演など、現在までリーダーとして精力的に活動。また2016年に演劇カンパニー『ヌトミック』を結成。「上演とは何か」という問いをベースに、音楽のバックグラウンドを用いた脚本と演出で、パフォーミングアーツの枠組みを拡張していく作品を発表している。

HOST R-DEPOT キャンプププロジェクト

私たちは、古き良きを大切にし空き家の仲介でまちに賑わいをつくっている倉石さん、演劇・音楽・展示等とまちを組み合わせ様々なイベントの企画運営を行っているたまちゃん、大学院に通いながらまちの学びの場づくりをしているシキちゃん、様々な方向からまちを楽しみまちで表現する3人組です。まちづかいの新拠点「R-DEPOT(アールデポ)」を中心に地域外から来られた人がまちを想い滞在できる仕組みをつくっています。

1

5月22日~23日
額田さん滞在1回目

滞在初回の5月には額田さんとR-DEPOTキャンプププロジェクトの皆さんとの顔合わせを実施。今回が長野市初訪問という額田さん。23日には「門前空き家見学会」にも参加させて頂き、門前で広がっているリノベーションの動きを知ることができました。

2

6月24日~29日
額田さん滞在2回目

5月の滞在を踏まえ、6月には1週間ほど長野市に滞在。数えで7年に一度の善光寺御開帳期間ということもあり、門前界隈は大変な賑わいでした。滞在最終日の29日は奇しくも御開帳の最終日。前立本尊の厨子の扉が閉まるのを見届け、滞在を終えました。

3

6月25日、26日、29日
額田大志WS「お土産を演奏する」

七味唐辛子などの善光寺土産に着想を得て、「お土産を演奏する」と題したWSを開催。額田さんが善光寺仲見世通りや門前で買い求めた模擬刀やビー玉、下敷きなどのお土産を使って、参加者の方と一緒に音楽を作っていきました。

4

11月14日
「たまに集まるナガノなんでもバンド」リハ初回

滞在後半戦となる11月~2月は、「たまに集まるナガノなんでもバンド」プロジェクトを実施。14日はその初回でした。一般公募の方と一緒に月に2~3回、たまに集まるゆるいバンドを結成し、2月の1st Liveを目指して活動していきます。

5

2月5日・8日ほか
「たまに葡萄」バンド自主練

12月のリハでバンド名が「たまに葡萄」に決定。2月に入ってからは、バンドマスターの額田さんがいない中、長野在住メンバーによる自主練も複数回行われました。2月26日の本番に向け、「たまに葡萄」バンドが少しずつ自走を始めていきました。

6

2月26日
「たまに葡萄」1st Live本番

13回のリハを経て、「たまに葡萄」1st Liveの本番を迎えました。R-DEPOTの古道具スペースに楽器を設置。古道具に囲まれながらの情緒あるライブとなりました。2回公演で計88名にご来場いただき、また再演の声も多く寄せられるなど、次につながる期待に溢れたライブとなりました。

滞在を終えて

ARTIST >>>

「人は、一人では生きていけない」とはよく見る標語ですが、バンドはそれを体現する最も小さな集合体の一つです。ギターは弾けないけど、ドラムが叩ける。ピアノが弾けないけど、歌詞が書ける。長野市内外から集まった十八人のバンド"たまに葡萄"は、どこに辿り着くかも不明瞭な道を歩みながら、十八人だから生まれた音楽を奏でました。集まり辛い時代の中で、集まることの大切さについて、今後も考えていけたらと思います。(額田大志)

HOST >>>

「長野に長く住むなら音楽を始めようかな」「"たまに集まる"っていいな」そんな人々が集まった大所帯バンド“たまに葡萄“。練習はまちの文化拠点ネオンホール、本番は古道具をバックに音と紡ぎ、客席にはご近所さん、飲食のお姉さんが集まり身体をゆらしている。こうしたまちの想いが交差する、すこやかな空間となりました。「こういう場があるまちっていいよね」と言える時間をみんなと一緒につくれて、とても嬉しく思います。(R-DEPOT キャンププロジェクト 川向思季)

滞在の記録はこちら

南相木ダムでのフィールドレコーディングの様子

Unseen Sea

八ヶ岳山麓に位置し、山に囲われた長野県にありながら「海」をその名に持つ小海町。音楽が聴かれる環境や音が生み出す場に着目した表現活動を展開している蓮沼執太さんが、ホストの小海町高原美術館の皆さんと、小海町を含む南佐久郡をフィールドに創作活動を行いました。

日本で最も長い川・千曲川（信濃川）の源流エリアに位置し、日本海に棲む鯨が千曲川を遡ってくる民話も伝承されている小海町の周辺には、他にも「海尻」「海ノ口」など、海がつく地名が多くあります。そうしたことから「川」と「海」をテーマに据え、リサーチとフィールドレコーディングを進めました。

まず 5 月の初滞在では、安藤忠雄設計の美術館建築がつくる周辺空間を生かし、建物の内外を観客が巡る大胆なサウンドパフォーマンスを開催。6 月には、北相木村・南相木村の千曲川支流を遡り、滝、ダム、小川でのフィールドレコーディングを実施。10 月には小海中学校の 2 年生を対象に特別授業を行い、音に着目して生徒がそれぞれの場所で撮影・採集した川や水路の映像を繋いだ映像作品を制作、小海町高原美術館開館 25 周年記念展『芸術の畑に種を蒔く』で、３つの町村に跨る撮影場所のマップとともに展示しました。

そして１月には、蓮沼さんが録った信濃川河口の波音を、小海町高原美術館の屋外に大音量で響かせるパフォーマンスを行い、映像作品『Unseen Sea』を撮影。氷雪に覆われた八ヶ岳が光る美術館の内外が波のざわめきに満たされ、海辺を錯覚させる光景が立ち現れました。最後に、全面凍結した松原湖の氷上から水中音のフィールドレコーディングを行い、春夏秋冬に渡った滞在制作を締めくくりました。

ARTIST 蓮沼執太

1983年、東京都生まれ。蓮沼執太フィルを組織して、国内外での音楽公演をはじめ、多数の音楽制作を行う。また「作曲」という手法を応用し物質的な表現を用いて、彫刻、映像、インスタレーション、パフォーマンスなどを制作する。2013年にアジアン・カルチュラル・カウンシル（ACC）のグランティ、2017年に文化庁・東アジア文化交流使に任命されるなど、国外での活動も多い。第69回芸術選奨文部科学大臣新人賞を受賞。

HOST 小海町高原美術館

八ヶ岳のふもと松原湖高原に建つ美術館。「人と自然の融合・調和」をテーマに建築家安藤忠雄氏によって設計されました。高原の傾斜地はそのままの形で生かされ、まわりの豊かな自然と館内部は閉ざされることなく呼応しています。島岡達三氏の陶芸作品、栗林今朝男氏、谷本清光氏の絵画作品等を所蔵し、郷土の作家、国内外の現代美術、写真、建築、デザイン、アニメーション等を扱った特色ある企画展を開催しています。

1

5月3日〜7日

サウンドパフォーマンス

蓮沼さんの第１回目の滞在を５月３日〜７日にかけて実施。５月４日には早速、小海町高原美術館にて開催していた磯谷博史『動詞を見つける Find Your Verb』展内にてサウンドパフォーマンスを行いました。また、５月７日には松原諏方神社の御柱祭も見学しました。

2

6月19日〜21日

南佐久郡フィールドレコーディング

６月は千曲川の支流を遡り、小海町を飛び出して北相木村・南相木村へ。南相木村では、名所・おみかの滝にて滝の音や水中音を採音したほか、日本一高い場所にある南相木ダムを訪れ、ダム湖上からの採音を試みました。

3

6月20日

認定こども園「ちいろばの杜」訪問

佐久穂町にある認定こども園「ちいろばの杜」を見学させて頂きました。園児が書いた歌詞をもとに歌をつくってみんなで歌うなど、子ども達の自発的な創造活動を大切にしているちいろばの杜の活動を学ぶことができました。

4

10月4日

小海中学校特別授業

この日は小海中学校２年生を対象に特別授業を実施。７月に事前レクチャーを行い、生徒にあらかじめ、身近に流れる川や水路を撮影してきてもらいました。４日の授業では、これらの映像を皆で鑑賞し、撮影した場所を地図に書きこんでいきました。

5

11月26日〜12月19日

『芸術の畑に種を蒔く』展

10月４日の特別授業で鑑賞した川の映像を、蓮沼さんが１つのサウンドインスタレーション作品に仕上げ、小海町高原美術館開館 25 周年記念展覧会『芸術の畑に種を蒔く』にて公開しました。

6

1月20日・21日

小海町での映像収録

小海町高原美術館にて映像作品を制作。20日は、蓮沼さんがマイクを転がして館内外を歩く『Walking Score』を、21 日には美術館の屋外に設置したスピーカーから波の音を流す『Unseen Sea』を制作。また、最終日には全面結氷した松原湖にてフィールドレコーディングを行いました。

滞在を終えて

ARTIST >>>

僕にとって未開の地だった小海。一年かけてじっくり近づきました。美術館でのパフォーマンス、こども園の見学、中学生とのワークショップ、凍った湖でのクリエーション。人とのご縁を感じながら、淡くつながることで生まれた出来事。水環境に恵まれた美しい土地で思考したことをこれからも育んでいきたいと思います。多くの発見をありがとうございました。（蓮沼執太）

HOST >>>

小海町の近くに源流をもつ千曲川は、新潟県に入ると信濃川に名を変える日本で一番長い川です。１年に渡る蓮沼執太氏の滞在制作はまるで日本海までの旅のように感じました。川の流れは蛇行したり速度を変えたり時には淀んだりしますが、予定調和ではない蓮沼氏の制作はまさに川の流れのようでした。プロジェクト名からも伺える視覚に頼らない制作は環境を取り込み、多くの人を巻き込んだ驚きと緊張感と発見に満ちたものでした。（小海町高原美術館 中嶋実）

滞在の記録は
こちら

踊るからだでみつめる安曇野のくらし

穂高南小学校でのアウトリーチ授業の様子

安曇野では、関西のコンテンポラリーダンスシーンにおいて注目を集めるダンサーの斉藤綾子と益田さちによるダンスユニット・...1[アマリイチ] が 2021 年に引き続き滞在制作を実施。
自転車と徒歩で移動しながら、ダンスでつなぐ公演「うちそと駅伝」を開催するなど、安曇野全域でダンスを披露した 2021 年とは打って変わり、滞在 2 年目となる本年は、ホストの安曇野市教育委員会が培ってきた経験や結びつきを存分にいかした創作活動を展開。市内の子ども達との交流や、安曇野市が参画するイベントへのゲスト出演、また遺跡や古寺を訪問・リサーチするなど、教育やアート、歴史など分野をまたいだ積極的な活動を行ってきました。
特に子ども達との交流という面では、9 月に穂高南小学校にて 2 年生・4 年生の全クラスを対象にしたダンスワークショップを実施したほか、12 月には明科中学校で「アーティスト・イン・スクール」として出張アトリエを行いました。生徒が ...1[アマリイチ] の創作現場を訪れるなど、アートと教育の新たな出逢いを試みる有意義な時間となりました。
滞在 3 年目となる来年 2023 年には、3 年間の集大成となる事業を実施する予定です。まだまだ続く ...1[アマリイチ] と安曇野市教育委員会の取り組みにこれからもご期待ください。

ARTIST ...1[アマリイチ]

斉藤綾子と益田さちによるダンスユニット。2015 年夏に結成。関西を拠点に活動している。主な作品に『...1 [アマリイチ]』(2016 年)、『punk・tuate［パンク・チュエイト］』（2018 年）、『うちそと』（2018 年）などがある。クラシックや J-POP、洋楽などジャンルに囚われない様々な音楽で踊る。2 人一緒に同じ振付を踊る「ユニゾン」が持ち味。2021 年長野県芸術監督団事業「NAGANO ORGANIC AIR」で安曇野市に複数回滞在し、『うちそと駅伝』や新作公演『イチニタスアヅミノノ』を発表。

HOST 安曇野市教育委員会

安曇野市教育委員会（文化課文化振興担当）は、市民が芸術文化に親しむ機会を設けるため文化事業を担当。若手音楽家を発掘する新進音楽家オーディションや安曇野出身の映画監督の熊井啓作品の上映会などを開催。また、市民との協働により早春賦音楽祭や信州安曇野薪能などの文化イベントを実施してきた。豊科近代美術館・高橋節郎記念美術館など市内の美術館を管理。2021 年書籍『安曇野風土記Ⅳ安曇野の美術』刊行。

1

8 月 15 日～17 日
安曇野リサーチ①

滞在初日の 15 日は国営アルプスあづみの公園などを訪問。安曇野市が 2022 年より始めた「あづみのミュージアムカード」を集めて回りました。また、古刹 満願寺を訪れ地獄絵を見学しました。16 日には上高地を散策し、前年の常念岳登山に続き、体で長野県の自然を体験しました。

2

9 月 23 日～27 日
安曇野リサーチ②

9 月はこれまで、あまり行くことができなかった明科地区に滞在。古民家宿に宿泊しながら各地を巡りました。犀川を下り長野市の久米路橋を訪れたほか、25 日には中房温泉を訪れ、地熱の力を満喫。山岳観光の拠点としての安曇野の一面を知りました。26・27 日には穂高神社の御船祭りも見学しました。

3

9 月 26 日
穂高南小アウトリーチ

この日は穂高南小学校でのアウトリーチ授業を実施。2 年生と 4 年生の計 6 クラスを対象に、6 時限まで連続でダンスワークショップを実施しました。初めてのコンテンポラリーダンスに子ども達も興味津々。お昼には 2 年生と一緒に給食を食べました。

4

9 月 30 日～10 月 3 日
安曇野リサーチ③

3 回目の安曇野滞在となる今回は「体験」をもとにしたリサーチを実施。長野県で広く普及しているローカルスポーツ・マレットゴルフを体験したほか、安曇野滞在 2 年目にして蕎麦作りも初体験。全身で安曇野を満喫しました。

5

10 月 2 日
あづみの公園早春賦音楽祭出演

この日は国営アルプスあづみの公園で開催した「あづみの公園早春賦音楽祭」に ...1[アマリイチ] の 2 人がゲスト出演。オープニングセレモニーでは、県歌「信濃の国」の合唱とともに踊ったほか、午後は公園内各所でダンスを披露しました。

6

12 月 1 日～6 日
アーティスト・イン・スクール

12 月は 6 日間にかけて滞在制作を実施。市内の施設で稽古を行ったほか、神竹灯が行われている穂高神社にも訪問。また、2 日には明科中学校にてアーティスト・イン・スクールを実施し、中学校の空き教室を活用した滞在制作も試みました。

滞在を終えて

ARTIST >>>

2 年目の安曇野は土地についてより深く知ることができた。上高地と中房温泉を巡り、観光地と安曇野の関係の強さを感じた。アウトリーチでは安曇野の小学生がダンスにどんなイメージを持っているか、コンテンポラリーダンスをどのように捉えるかに触れられた。また、小学生と親御さんに出会えたことも大きかった。更なる目標としては、アーティスト・イン・スクールとして学校で過ごすことの可能性や、人と出会う為の取組を考えたい。(...1[アマリイチ])

HOST >>>

今回の NOA は、学校との関わりを考える機会となった。従前の出前スタイルで、「全校または学年全員に同じ体験をさせたい」という要望に応じるには、アーティストに負担がかかる。一方、アーティスト・イン・スクールならば、学校も授業の遣り繰りに苦労することなく、アーティストも快適なスタジオを確保できる。少子化の時代において、双方とも両立できるスタイルだろう。中学生は ...1[アマリイチ] のダンスを「観たことない系」と賞した。(安曇野市教育委員会 三澤新弥)

滞在の記録はこちら

ふしぎうぶすなレジデンシー @信濃大町

STRANGER-THAN-PHENOMENON

横山さんによって空き店舗から劇場に変化させた空間でパフォーマンス

ダンサー・振付家として国内外で活躍の幅をひろげている横山彰乃さんが、大学進学前まで暮らし、現在は親戚を訪ね帰るだけとなった " 元・地元 " 大町市に滞在。知らないうちに体に組み込まれていた無意識の大町や、幼い頃から暮らしたからこそ知らない地元を行ったり来たりしながら、様々な経験を積み重ねた現在の眼差しでリサーチ。子どもの頃に訪れ、強く印象に残っていた元ファンシー雑貨店のショーゲツを会場に、ひと夏をかけて横山さんが中心となりホストや地域の住民の方が参加し劇場の舞台装飾を制作。横山さんは一から会場を設営をするなかでイメージを膨らませ作品を立ち上がらせました。

ホストの信濃大町アーティスト・イン・レジデンスには、偶然にも保育園時代からの知人がおり、幼馴染の信頼感で滞在や制作をサポート。北アルプス国際芸術祭のノウハウを活かし超強力なバックアップと地域の巻き込み力で横山さんと“大町”を再会させてくれました。

また、滞在中まるで運命かのような出会いによってさまざまな場所でパフォーマンスをする機会がありました。パフォーマンスをすることでファンが生まれ次のパフォーマンスに足を運ぶサイクルが生まれていました。北アルプス国際芸術祭が醸成した住民のアートに対する眼差しや横山さん自身の地元での振る舞いなど、いくつも偶然が重なったことで、アーティスト、地域双方でプラスに動きだしていく過程が見えた特徴的なプロジェクトとなりました。

ARTIST 横山彰乃（ダンサー / 振付家）

ダンスカンパニー［lal banshees］主宰。舞台活動と並行し、ライブ、MVへの振付を行う。モダンダンス・ストリートダンステクニックをベースとしながら、個人の感覚に着目し、派生した独自のムーヴメントを追求。生まれ育った自然豊かな風土感覚から、見落として通り過ぎてしまうような現実をファンタジックに切り取り、性別に囚われない中性的なダンスを創作する。YOKOHAMA DANCE COLLECTION 2020 CompetitionI 審査員賞、Camping2020 賞、2021年度日本ダンスフォーラム賞など受賞。2022 年度セゾン文化財団セゾン・フェロー

信濃大町
あさひAIR

HOST 信濃大町アーティスト・イン・レジデンス

大町市は、北アルプスの麓に広がる豊かな自然と長い歴史の中で育まれた文化を感じる街。文化・芸術活動を盛り上げることを通じて、芸術文化が持つ情報発信力を最大限に活用し、市の多様な魅力を磨き上げ、地域ブランド力の向上を図り、地域の活力を蘇えらせるとともに、大町市への新しく大きな人の流れを創出し、交流・移住人口や定住人口の増加にも資するため「信濃大町AIR事業」を立ち上げ活動している。3年に一度、県内最大級の「北アルプス国際芸術祭」も開催。

1

5月31日〜6月2日

大町リサーチ①

まずは“お祭り”と“水”についてリサーチするべく、国宝・仁科神明宮や信州松崎和紙工業、若一王子神社、居谷里水源、ダムエリア、塩の道ちょうじや（旧塩の道博物館）・流鏑馬会館など市内に点在する大町を知ることができる場所を巡りました。

2

7月19日〜25日

大町リサーチ②

ホストである信濃大町アーティスト・イン・レジデンスが秋に開催の展示発表「おもいっきり、水」に併せて公演を行う会場探しで商店街の空き店舗を巡りました。横山さんが幼い頃立ち寄った記憶がある元雑貨店ショーゲツで公演することに決定。

3

8月〜9月

会場設営

シャッターが閉じたままの空間を横山さんやホスト・地域のみなさんらで約2ヶ月をかけて掃除・設営。大町で収穫された藁を使い、印象的な吹き抜けを閉じ込めるような繭を創作。長い時間をショーゲツで過ごすことでパフォーマンス創作のイメージを膨らませました。

4

8月13日・9月10日
9月18日10月1日

各所でパフォーマンス

滞在中の出会いから大町温泉郷お客様感謝 DAYs 出演や森の休息イベントでのパフォーマンスを披露。また「おもいっきり、水」のアーティストプレゼン会や地元保育園児が集まるオープニングイベントでのパフォーマンスで老若男女を虜に！

5

10月7日

大町名店街で踊る

プレイベント「おもいっきり、Night」では、名店街と呼ばれているレトロなアーケード街を舞台にダンスパフォーマンスを披露。滞在中に幾度となくさまざまな再会を果たした横山さんにとってベスト級の印象に残る時間となりました。

6

10月8日〜10日

本番10公演 @ショーゲツ

「おもいっきり、水」にて一から作り上げたショーゲツの舞台で3日間10公演回遊型パフォーマンスを開催。入場者は約330名。夏のパフォーマンスでファンになった子どもや通りがかりの方など、ダンスと地元の接点になるような公演となりました。

滞在を終えて

ARTIST >>>

故郷で AIR というあまり聞いたことのない、奇妙な体験の連続でした。

空き店舗が活動拠点となったことで近隣商店のみなさんと毎日顔を合わせ何気ない会話をし、作品制作において日常への溶け込みを体験できたことがとても新鮮でした。ひらかれていて日常にも馴染んでいけることの大事さを感じました。小学校等での WS が叶わなかったので、いつかできたら良いなと思います。（長野に帰りたくなりました。笑）（横山彰乃）

HOST >>>

大町市では、信濃大町 AIR を主催していますが、今回はホストとして地元出身のアーティストを受け入れるという初めての経験をさせていただきました。今回の取り組みを通して、横山さんには“ふるさと”を改めて見てまわり、新たな出会いや感じたことをダンスという形で表現していただき、また横山さんの地元の知り合いや多くの市民には制作段階から積極的に関わっていただけたなど、新たな可能性を感じることができました。（信濃大町アーティスト・イン・レジデンス　高橋勇太）

滞在の記録は
こちら

木曽めぐるナンチャラホーイ
【私道かぴ】

※『木曽、わたしたちのまつり』(YouTube)

© やまぐちなおと

王滝村御嶽神社八幡堂での上演を終えた私道かぴさん（左）と俳優・沢柳優大さん（右）

劇作家・演出家の私道かぴさんは、昨年度の NOA 短期滞在研修プログラムに参加して信州各地をめぐるなかで木曽ペインティングス Vol.5を見学。「木曽にすごい芸術祭がある！」と気になったことや、日常的に演劇に触れる機会が少ない地方にこそ出向く必要性を強く感じ、今年度木曽滞在アーティスト公募に応募されました。
ホストの木曽 AIR ネットワークのアテンドで「祭り」を中心に、木祖村や王滝村、木曽町などをリサーチ。脈々と継承されているのは作法や動作だけでなく、何よりも熱い想いが受け継がれている場面に触れ、人があまり聞こうとしないところこそ丁寧にヒアリングを重ねて得た言葉たちから短編演劇『木曽、わたしたちのまつり』を創作しました。
藪原祭りの獅子舞、王滝村御嶽神社の三剣の舞、木曽踊りの３章仕立ての一人芝居で、10/22「秋の後夜祭」@王滝村八幡堂、10/23 木曽ペインティングス Vol.6 オープニングレセプション@木曽町宮ノ越・義仲館巴庵横芝生の２回上演。木曽に暮らす人の想いをそれぞれの舞台で浮かび上がらせました。
この作品の上演をきっかけに王滝村では新たな祭りが誕生し、６回目となる木曽ペインティングス芸術祭では初めて演劇の上演が行われました。「祭り」は地域にとって一番身近な「演劇」だと捉えた私道さん。アーティスト・ホスト双方がジャンルを飛び越え、ひとつの場を共有して刺激し合えるプロジェクトとなりました。

© 山下裕英

ARTIST 私道かぴ

劇作家・演出家。京都を拠点に活動する団体「安住の地」所属。若者の未婚問題やゲーム依存症をテーマにした作品など、人々の生きづらさを描いた会話劇を発表。安住の地では、作家・岡本昌也との共同脚本・演出にて創作も行う。お寺やギャラリーなど劇場以外の場所でも積極的に公演を行っている。2020年は無言劇『であったこと』、映像劇『筆談喫茶』など、コロナ禍の現状を活かした新しい劇を創作した。APAF2020 Young Farmers Camp 修了。

HOST 木曽 AIR ネットワーク

今回のNOA 木曽のために結成された木曽郡４地域のホストネットワーク。
【木曽町／木祖村】木曽ペインティングス実行委員会 岩熊力也さん・岩熊美幸さん、【南木曽町】株式会社フォークロア 熊谷洋さん、【大桑村】LaMora 奥野宏さん、【王滝村】合同会社 Rext 滝越 倉橋孝四郎さん、杉野明日香さん、近藤太郎さん
郡内全町村をフィールドにアーティスト・イン・レジデンスを展開していきます。

1
7月8〜10日
リサーチ①木祖村藪原祭り

初回の滞在は、舒達さんとともにコロナ禍の影響で３年ぶりの開催となった藪原祭りを見学。大きな山車に乗った獅子舞の動きを見つめるOBの方から話をうかがったり、祭りという場が地域の外に出てしまった人が久々に再会し近況を報告しあう場であることを目の当たりにしました。

2
8月12日〜15日
リサーチ②王滝村滞在

王滝村のホストRext滝越さんのゲストハウス常八に「安住の地」俳優沢柳優大さんとともに滞在。ダムや自然湖、御嶽神社をまわったり、トウモロコシの農作業をお手伝い。何気ない王滝の日常にまぜてもらった時間が貴重な経験となりました。

3
8月14日
リサーチ③お盆ふれあい祭り

王滝村の村民による村民が楽しむための祭りであるお盆ふれあい祭り。ホストのRext滝越のみなさんが実行委員ということもあり準備段階から参加。王滝村での木曽踊り復活や超近距離での打ち上げ花火に大興奮でした。

4
10月8〜10日
リサーチ④木曽踊り保存会インタビュー

今年の夏、木曽福島の木曽踊りはコロナの影響で中止となり、実際に見ることができなかったため、ホストの岩熊さんの紹介で木曽踊り保存会・木曽木遣り筏衆の越孝弘さんにインタビューと木曽踊りのデモンストレーションを披露していただきました。

5
10月22日
『木曽、わたしたちのまつり』上演 @王滝村御嶽神社八幡堂

© やまぐちなおと

王滝村では今年初開催となった王滝小・社協・木曽ペ合同芸術祭の後夜祭に位置付けた「秋の後夜祭」にて「木曽、わたしたちのまつり」がついに初上演。舞台は夏の御嶽神社例大祭で三剣の舞などが披露される八幡堂。ラストは観客と一緒に木曽踊り！

6
10月23日
『木曽、わたしたちのまつり』上演 @木曽町宮ノ越巴庵

© やまぐちなおと

木曽ペインティングス vol.6「僕らの美術室」オープニングレセプションでトリを飾る上演。太陽が沈みはじめた美しい芝生を舞台に俳優・沢柳優大さんが約30分の作品を一人芝居で演じました。

滞在を終えて

滞在の記録はこちら

ARTIST >>>

夏から冬にかけて、数回に渡って木曽の様々な地域に滞在しました。訪れる度に新しい発見があり、「木曽」と言っても、その文化は地域によって随分違うことに気づきました。「お祭」をテーマに様々な方にお話を聞くにつれ、一人ひとりの人生や、地域の状況が浮かび上がってくる日々は非常に刺激的で、これからの創作にも強く影響しそうです。短編演劇を王滝村と木曽町で発表した際の、住民の皆さんの笑顔はずっと忘れないと思います。（私道かぴ）

HOST >>>

木曽とは張り巡らされた無数の襞のことだ。そして木曽とは無数の文化が対立し合う場である。私道かぴはシャーマンとしての演者に複数の木曽の人々の声を憑依させた。ここで物語を語るとはポリフォニーでしかなしえないことを彼女は知っているのだ。（木曽ペインティングス 岩熊力也）

村の祭りの準備にいきなり駆り出され、溶け込みながら楽しんでいたかぴさん。時にグッと入り込み、時に一歩ひいて周りを俯瞰して村民を感じとっていた。かぴさんがリサーチすると村民は笑顔になって笑っていた。（Rext滝越 倉橋孝四郎）

私道さんは神楽の踊り手にインタビューをした。「自分はいつまでこうやって舞うことになるのかな…」踊り手の素直な気持ちが台詞として語られる。毎年舞いが行われるお堂でこの芝居があった事はとても意味があった。（Rext滝越 近藤太郎）

木曽めぐる ナンチャラホーイ【舒達】

木曽のいたるところに祀られている石仏をリサーチする舒達さん

※無無明 PV（Youtube）

人間の信仰や宗教意識などのコンセプトで、彫刻を中心に独特の作品世界を表現する美術家の舒達（SHUDA）さんは、ホストの木曽AIRネットワーク４団体がそれぞれの強みを生かしたコーディネートに沿って、自然豊かな木曽郡各地の石仏・道祖神や、木祖村の薮原神社、木曽町福島の水無神社、南木曽町妻籠の和智埜神社、王滝の御嶽神社の祭りなど、信仰に関する様々な場所をめぐり、歴史や暮らしに触れながら夏～秋にかけて滞在制作を行いました。滞在のなかで、廃仏毀釈により欠損した頭部に別の石を乗せて頭に見立て祀られている石仏を発見したり、逆に信仰されなくなった石仏から「信仰心」に触れることを経験。木曽地域で暮らす人とそれを超越する存在との関係性を構造的に捉え、3Dプリントや野焼きの手法を用いて、自らの手から生まれる創作を飛び越えて現れたモノとの共存を表現。2022年10月23日から11月７日に開催された木曽ペインティングス芸術祭 Vol.6「僕らの美術室」にて、木祖村向畑地区にある特徴的な蔵を会場に作品「無無明（むむみょう）」を展示しました。舒達さんの視点を通して現れた木曽地域独特の価値観や死生観を、そこに暮らす人々が再認識するきっかけとなったり、広い木曽郡を編みつなげていく役割であることの発見につながるプロジェクトでした。

ARTIST 舒達 SHU DA

1995年 中国湖北省生まれ。武蔵野美術大学造形研究科美術専攻彫刻コース修了。京都市立芸術大学美術研究科博士課程（彫刻領域）在籍中。近年の主な展示に「彼方はいつもさまよっている」（黄檗宗大本山萬福寺、京都、2021年）、「Multiplayer ー iART 青年芸術家企画展」（YUAN 美術館、重慶、2021年）。「無常」の概念に基づく無限変化に見られる表象とその可能性の研究を行っている。古代から現代までさまざまな幅広い分野の五感における無限表現への挑戦の事例を明らかにしながら、現代的なメディアを用いた無限表現の可能性について実践的な探求も試みる。

HOST 木曽 AIR ネットワーク

今回の NOA 木曽のために結成された木曽郡４地域のホストネットワーク。
【木曽町／木祖村】木曽ペインティングス実行委員会 岩熊力也さん・岩熊美幸さん、【南木曽町】株式会社フォークロア 熊谷洋さん、【大桑村】LaMora 奥野宏さん、【王滝村】合同会社 Rext 滝越 倉橋孝四郎さん、杉野明日香さん、近藤太郎さん
郡内全町村をフィールドにアーティスト・イン・レジデンスを展開していきます。

1

7月8～10日
木祖村藪原祭り

岩熊さんの案内で初回の滞在は私道かぴさんと一緒に、コロナ禍の影響で３年ぶりの開催となった藪原祭りの見学からスタート。祭りに関わる人の情熱や、獅子を乗せた山車が各家々の前でとまり舞い、１日かけて町を往復する時間の長さに衝撃を受けていました。

2

7月23～28日
３地域の夏祭り巡り

みこしまくり（木曽町）、和智埜神社祭礼（南木曽町）、御嶽神社例大祭（王滝村）を立て続けに見学。荒々しく神様を喜ばせているみこしまくりと和智埜神社祭礼。山岳信仰の影響か神々しい御嶽神社例大祭。各地域の特長がよくわかる滞在になりました。

3

7月25日
南木曽町・木地師の里へ

南木曽町結い庵に滞在し、ろくろ細工で有名な木地師の里を訪ね、お話をうかがいました。器を一つ作るまでに至る人間の寿命を飛び越えるほどの時間の長さや木に対して抱いている敬意に触れ、自然の中で共存する人の思いに感銘を受けました。

4

8月13日・14日
石仏巡り

木曽町や王滝村を中心に、各地域のホストのみなさんと一緒に数多く残されている道祖神や石仏を巡りました。造形だけでなく地域での祀られ方の違いに人を超越する存在への畏怖に触れただけでなく信仰されなくなったもののほうにこそ宿る「信仰心」を感じました。

5

9月26日～28日
大桑焼

大桑中学校にてホストであり「大桑焼」の先駆者のアーティスト・奥野宏さんと一緒に大桑の土を練り木曽にまつわる造形物を創作。La Moraの窯で野焼きへ。作者の手を飛び越えてこそ仕上がる野焼きはとても刺激的な体験となりました。

6

10月23日～11月７日
作品展示「無無明」

© やまぐちなおと

木曽ペインティングス Vol.6「僕らの美術室」にて作品展示。元の住人である背の低いおばあちゃんが暮らしていた蔵を最大限に活かし作品へと昇華されました。また、石膏で型をとる「立体物をコピーしよう」のワークショップも開催しました。

滞在を終えて

滞在の記録はこちら

ARTIST >>>

夏から秋まで、木曽各地域における様々な信仰を中心に、祭り・行事・遺跡などをリサーチし、人と超越する存在の繋ぎ方を体験しました。里山である木曾の人たちの独特な世界観・死生観を感じて、大変感銘を受けました。地域と信仰のイメージが随分変わりました。これからの制作・研究にも参考になると思います。展示とワークショップを参加・協力してくれた皆さまに感謝致します。（舒達）

HOST >>>

舒達さんの目を通して現れた目に見えなかった神様の形。
3Dプリンターの幾重もの層の積み重ね、焼物の焼成という自然のプロセスを通すことで、炎に委ねる行為から生まれる予期せぬ造形が現れる。
目に見えないもの、石、木、何にでも拝んでしまう日本人の宗教観。思わず舒達さんの作品に拝みかけつつ、「あれ、神様てなんやっけ？」と我に返る。
デジタルとアナログを行き来するナイスな木曽路トリップであったら幸いです。
（LaMora 奥野宏）
“入れ子”を巡る冒険。舒達さんの木曽滞在は、きっとこんな風だったろうと思います。その作品は観念的、視覚的な入れ子構造が、空間に幾重も波紋みたいに広がって、まるで無常な４D曼荼羅。嗚呼、また入れ子トークしたいです。
（株式会社フォークロア 熊谷洋）

『茅野×ヒマラヤ　踊る極致、登る極地』終演後、出演者・スタッフ全員での一枚。

みちのちのダンススケープ

ダンサー・振付家の森下真樹さんと写真家の石川直樹さんが滞在制作を続ける「みちのちのダンススケープ」は、今年度から茅野市民館の主催事業として継続、諏訪湖から八ヶ岳にまたがる諏訪地域一帯のリサーチをもとに創作を行っていきます。

諏訪に住む人たちにとって、今年は７年に一度の御柱祭の年でした。５月に森下さんは諏訪大社下社里曳き、秋には小宮の御柱祭にも参加。地域の皆さんが鳴く木遣りの声に魅了されました。

蓮の花が咲く８月に合わせて玉川地区の蓮畑でダンス映像の撮影、並行して森下さんがオンラインでワークショップを行い、市民の皆さんもそれぞれのとっておきの場所で踊る映像を撮影しました。

八ヶ岳登山も今年の軸となる活動でした。石川さんは今年度、春から秋にかけてヒマラヤ山脈の 8,000m 級の山に次々と挑んでいましたが、その合間の９月に、森下さんとともに権現岳などを縦走。森下さんはさらに最高峰の赤岳にも登り、山の上からオンライン WS を行う実験も行いました。

11月の滞在は２人が揃い、『諏訪神仏プロジェクト』を見学、茅野市出身の建築家・建築史家、藤森照信さんの茶室で藤森さんとお会いし、諏訪の歴史･文化を研究する「スワニミズム」会長の原直正さんと守屋山に登りました。

これらの蓄積を共有する場として、２月に、みちのちのダンススケープ『茅野 × ヒマラヤ　踊る極致、登る極地』を開催。２人の過程を振り返るクロストークから、集大成の来年度につながる締めくくりとなりました。

ARTIST 森下真樹

幼少期に転勤族に育ち転校先の友達作りで開発した遊びがダンスのルーツ。これまでに10ヵ国30都市以上でソロ作品を上演。様々な分野のアーティストとコラボし活動の場を広げる。2013 年現代美術家 束芋との作品『錆からでた実』を発表し第８回日本ダンスフォーラム賞を受賞。2017年より自身のソロ「ベートーヴェン交響曲第５番『運命』全楽章を踊る」(振付 :MIKIKO、森山未來、石川直樹、笠井叡) を展開。

ARTIST 石川直樹

1977年東京生まれ。写真家。東京芸術大学大学院美術研究科博士後期課程修了。辺境から都市まであらゆる場所を旅しながら、作品を発表し続けている。2010年『CORONA』(青土社) により土門拳賞、2020年『まれびと』(小学館)、『EVEREST』(CCC メディアハウス) により日本写真協会賞作家賞を受賞。著書に、開高健ノンフィクション賞を受賞した『最後の冒険家』(集英社)、『地上に星座をつくる』(新潮社) ほか多数。

HOST 茅野市民館

八ヶ岳山麓の高原都市、茅野市にある茅野市民館は、茅野市美術館を併設し、劇場・音楽ホール、市民ギャラリー、図書室など多様な機能を合わせ持ち、JR茅野駅に直結した文化複合施設。「市民一人ひとりが主人公になれる場」の理念のもと、基本構想から市民が直接参加して作られた。さまざまな表現やアートに親しみ、文化をつくり、人々が集う地域の交流拠点を目指している。

1

5月13日～16日

御柱祭見学

2022年滞在初回は、諏訪大社下社の御柱祭（里曳き）を見学。茅野市民館スタッフで地元・下諏訪町出身の木川さんにアテンドしていただき、14日～16日までの３日間、御柱祭を満喫しました。数えで７年に一度の御柱祭に森下さんも終始大興奮のご様子でした。

2

8月5日～6日

ダンス動画撮影@蓮畑

2021年に実施した「What is『みちのちの』？～知られざる茅野を語ろう会」にて地元の方からご紹介いただいた茅野市玉川の蓮畑にて、森下さんによるダンス映像作品の収録を実施。蓮畑所有者の吉川さんも出演し、素敵な動画作品に仕上がりました。

3

9月14日～15日

「とっておきのちので踊って、撮って」オンライン WS

９月には森下さんによるオンラインワークショップを開催。森下さんが蓮畑で踊ったダンスを、オンライン上で参加者の方々にレクチャーしました。レクチャー後、参加者の方々が自分の好きな場所でダンスを踊り、その様子を撮影しました。

4

9月9日～10日、25日～27日

八ヶ岳登山

９月は森下さん念願の八ヶ岳登山を敢行。９日～10日は、石川さんと一緒に編笠山～西岳を縦走。続く25日～27日はアシスタントの村上さんとともに天狗岳～赤岳まで縦走しました。赤岳では14 日に開催したWS参加者とオンラインでつないで一緒に踊りました。

5

11 月 20 日～21 日

茅野・諏訪リサーチ

11月は森下さん・石川さんが揃ってのリサーチ。20 日は建築家・建築史家の藤森照信さんにお会いし、午後は諏訪地域一円で行われている諏訪神仏プロジェクトを見学。21日はスワニミズム会長の原直正さんのご案内のもと、守屋山に登りました。

6

2 月 23 日

『茅野×ヒマラヤ　踊る極致、登る極地』

本年度の成果発表として『茅野 × ヒマラヤ　踊る極致、登る極地』を開催。公演前半は森下さんと WS 参加者によるダンスパフォーマンスを披露。後半は石川さんによるヒマラヤ遠征のトークを挟んだのち、森下さんと石川さんでこの１年の滞在を振り返りました。

滞在を終えて

滞在の記録はこちら

ARTIST >>>

「みちのちのダンススケープ 」で出逢った人たちと面白く繋がることができたことが大きな収穫です。この先どうなるのだろう！？…という未知のワクワク感があります。「足でカラダでその地を掴んで知っていく」というようなことを石川さんがよく言っているだけあって、カラダを存分に使ってこの地を掴みたい…と、こんなにも進んでカラダを張っているプロジェクトは私のこれまでには多分ありません。この地でいくつもの人生初の体験ができ充実の２年間でした。(森下真樹)

2022 年は狂ったようにヒマラヤへ通い、日本にいない日々が続きました。それでも遠征と遠征の合間に茅野を訪ね、八ヶ岳を縦走し、藤森照信先生の建築に触れたりして、疲弊した身体を癒すような滞在ができました。中間発表となる2023 年２月の公演では、茅野とヒマラヤが同じ地平の上にあることを再確認しつつ、たくさんのお客さまと交流ができて嬉しかったです。2023 年もまた茅野でたくさんの新しい出会いに恵まれることを願っています。(石川直樹)

HOST >>>

今年度は茅野市民館が主催となり、「地域をカラダで知る」リサーチを引き続き行いました。コロナ禍で地域の方との幅広い交流が難しい中、リサーチ先で出会った方々とピンポイントに交流を深める一年となりました。中間発表では、お二人がこの地域で感じたことが来場した方々とも共有され、我々も含め、新しい気づきに繋がったと思います。来年度、二人のアーティストの活動がどう花開き、地域になにをもたらすことになるのか楽しみです。(茅野市民館指定管理者株式会社地域文化創造　久保祥剛)

瑞光院（阿南町）にて開催した「新野物語」阿南町公演の様子

短編演劇『新野物語』ツアー2022

阿南町新野には、2021年に引き続き、劇作家・俳優の山田百次さんが滞在。新野だら実行委員会の金田信夫さん・渚さんがホストとなり、昨年の滞在中に創作した短編演劇『新野物語』を阿南町・売木村の２町村にて再演しました。2022年にユネスコの無形文化遺産に登録された「新野の盆踊り」を取り扱った本作。新野、津軽の方言を用い、地域の人々の情感をとらえた上演は、観客・関係者の心を掴み、昨年の初演時には再演を望む声が多く寄せられ、本年のツアー公演につながりました。また、ツアー終了後には、地域のイベントでの上演依頼がかかるなど、『新野物語』を通して阿南町新野の文化が内外に広がっていくのを実感することができました。
これらのツアー公演を経て、12月には東京・銀座 NAGANOにて新野だら実行委員会と信州アーツカウンシルの共同イベント『信州で活動しませんか？ 芸能・文化・アート × 移住定住・関係人口の取組をご紹介』を開催。首都圏在住者を対象に、信州アーツカウンシルや NAGANO ORGANIC AIR の活動を紹介するとともに、金田信夫さん・渚さんからは、「新野の盆踊り」「新野の雪祭り」といった伝統芸能の活動や、お二人が取り組んでいる阿南町新野への移住・定住の活動を紹介しました。その後の意見交換会にも多くの方にご参加いただき、アートを入口に伝統芸能や移住定住の側面に多くの関心を得ることができました。

ARTIST 山田百次

10代より青森を拠点とする劇団、弘前劇場で俳優活動をはじめる。2008年から活動拠点を東京に移し、津軽弁を多用する劇団を立ち上げ、作・演出・出演を行う。その後、劇団青年団の俳優、河村竜也と演劇ユニット、ホエイの活動を開始。
2018年『郷愁の丘ロマントピア』で第63回岸田戯曲賞最終候補ノミネート。また津軽弁による一人芝居『或るめぐらの話』を全国各地で行っている。

HOST 新野だら実行委員会

地域親和型アートイベント『新野だら』実行委員会は、「南信州の山村へアートの風を」をテーマに、ボランティアによるプロデュースを行ってきた。瑞光院を舞台に、新野所縁のアーティストを中心に2018年は演劇「TeaArrow」、切り絵パフォーマー「チャンキー松本」とストーリーテラー「物語屋」による影絵劇、2019年はスチールパンと横笛、アフリカンダンス「サブニュマ」、ビオラダガンバ「品川聖」等にご出演いただく。地元カフェや菓子店により、お茶の時間も楽しんでいただいている。

1
6月26日・27日
『新野物語』会場下見

『新野物語』ツアー公演に向けて、瑞光院（阿南町）・うるぎ Halo! - 岡田屋 -（売木村）・飯田創造館（飯田市）の会場下見を実施（飯田市公演については新型コロナウイルス感染症拡大の影響で中止）。各公演地でのイメージを膨らませていきました。

2
7月24日～29日
『新野物語』稽古

再演ということもあり、本番１週間前の7月24日から稽古開始。25日からは実際の公演会場である「うるぎ Halo! - 岡田屋 -」を借りての稽古となりました。本番をイメージしながら短期集中で作品を立ち上げていきました。

3
7月30日
『新野物語』阿南町公演

ツアー最初の地は、阿南町の名刹・瑞光院。１日１ステージのみの公演となりましたが、再演を聞きつけた多くの方が足を運んでくださいました。また、上演前には山田百次さんによる津軽弁講座も開催し、多くの笑いを誘いました。

4
7月31日
『新野物語』売木村公演

ツアー最終地は、阿南町のお隣・売木村。元旅館を改装したコワーキングスペース「うるぎ Halo! - 岡田屋 -」での上演となりました。土間部分を舞台にした上演は『新野物語』の作品世界にもあっており、現実と虚構が入り混じる素敵な時間となりました。

5
8月16日・17日
「新野の盆踊り」参加

ユネスコの無形文化遺産であり、『新野物語』の題材ともなった「新野の盆踊り」に参加。2020・2021年は新型コロナウイルス感染症流行の影響で中止となったため、昨年滞在時は参加できず、今年は念願叶っての参加となりました。

6
12月10日
新野だら実行委員会 × 信州AC ＠銀座 NAGANO

『信州で活動しませんか？ 芸能・文化・アート × 移住定住・関係人口の取組をご紹介』を銀座 NAGANO で開催。NOA 阿南町での取組みや新野だら実行委員会の活動、また「新野の盆踊り」や「新野の雪祭り」を実演を交えながら紹介しました。

滞在を終えて

ARTIST >>>
昨年の「新野物語」は観客の反応がとても熱く、これまで何度も演劇を上演してきたが、今までとは全く違う手応えを感じた。そして二年目、新野の瑞光院や売木の岡田屋での上演は前回にも増して豊かな演劇体験になりました。それは作り手としてのこれからの考え方にも影響するほどでした。「新野物語」は今後も折をみて、様々な所で上演し新野の PR の一助になれればと思っております。（山田百次）

HOST >>>
このホスト活動は、例えれば暗闇の宝に光を当て鏡に映してその価値に気づくようなものです。私たちは代々毎年時期が来れば、普通に祭りを行ってきました。信州アーツカウンシルの皆さんや脚本家・俳優の山田百次さんは「光」であり、参加された皆様の反応が「鏡」。この二つによって誇りと自信をいただきました。こんな新野の暮らしに魅力を感じ、移住した方と祭りを共に楽しみ暮らす。そんな未来の『新野物語』を夢見ています。（新野だら実行委員会 金田信夫）

滞在の記録はこちら

短期滞在研修プログラム2022

生きることとアートの呼吸 ～Breathe New Life

NAGANO ORGANIC AIR では 2021年に引き続き、2022年10月21～25日の５日間、「【短期滞在研修プログラム 2022】生きることとアートの呼吸 ～Breathe New Life」を開催。公募により選出された参加者５名にあわせ、信州大学人文学部との連携により学部生２名も加わり、長野県内のアート拠点や芸術祭、NAGANO ORGANIC AIR 実施地域や信州アーツカウンシルにて支援している事業者を訪問しました。

最終発表会後、参加者とスタッフ・オブザーバーの方々での一枚。

信州アーツカウンシル主催事業の『Re-SHINBISM1 そして未来へ』を出発点に、北は長野市から南は王滝村まで、５日間で計11市町村を訪問。NOA 実施地域や信州アーツカウンシル支援対象事業では、アーティストやホスト、支援事業者との交流も図るなど、鑑賞にとどまらない多様な研修体験となりました。また、滞在最終日の10月25日には、小海町のレジデンス施設「セミナーハウス」にて最終発表会を実施。滞在初日のガイダンスにて示された『「生きることとアートの呼吸」というタイトルを踏まえ、あなたが今後やってみたいと思う活動や企画をお考えください。』をテーマに、一人ずつプレゼンテーションを行いました。プレゼンテーションの後には、オブザーバーや他参加者からの質疑応答や意見交換も積極的に行われ、“生きること”と“アート”それぞれの関係や在り方について、互いに語り学びあう、５日間の研修の締めくくりにふさわしい時間となりました。

滞在の記録は
こちら

信州アーツカウンシル助成事業の〇と編集社『トビチ美術館』を訪問。

農家民宿＆大衆酒 Bar 常八にて、地域とアートの関わりについて伺う。

ブルーベリーガーデン黒岩では農業資材で作られたDIY 劇場を見学。

主な訪問先

『Re-SHINBISM1 そして未来へ』（長野市）、善光寺お朝事（長野市）、『トビチ美術館』（辰野町）、『SUWA× 文楽 本朝二十四孝　奥庭狐火の段』（岡谷市）、諏訪神仏プロジェクト（諏訪地域）、諏訪大社下社秋宮（下諏訪町）、諏訪大社上社本宮（諏訪市）、農家民宿＆大衆酒 Bar 常八（王滝村）、木曽ペインティングス vol.06『僕らの美術室』（木曽郡）、義仲館（木曽町）、シアター＆ゲストハウス 犀の角（上田市）、ブルーベリーガーデン黒岩（小諸市）、小海町高原美術館（小海町）、セミナーハウス（小海町）

研修に参加してみて

大村麻弥
（茂来学園大日向小学校音楽専科・ワークショップデザイナー）

今回この研修プログラムに『「ORGANIC」につなげること』に興味を持ち参加した。訪れた地はどこも違った表情を持ち、場の持つ力が全然違う性質だった。当然その地に息づく生活が違うのであり、生まれ出るアートが違う。必要になるアートが違う。
それぞれの地に息づく文化は、他からしたら驚くような風習であったりするけれど、その地で時間をかけて培われてきたものだ。研修を終えた今、それらを無理に繋ぎ合わせる必要はないのかもしれないと思っている。必要なのは新しいものを受け入れる土壌を作っていくこと。それはその土地の人でも、余所者でも、自分が本気で面白がれるかということにかかっている。自分のありのままを表現していくことが、それぞれの生きやすさを生み出すのだと考える。

平野明（舞台照明）

５日間の生活を通していろんな場所を見ていた。長野という場所、を透かして地元の青森、対して文化が集中する東京、そして現在地の京都。芸術実践の難しさに答えが出せないことにやきもきしていたが、今回その答えが自分なりに見つけることができたのは大きな収穫だった。地域に合った芸術の表現方法があるという理解と、それら作品は必ずコミュニティに影響を与えるということを信じられた研修だった。出会った作品や場所にはとてもやる気をもらったし、普段出会うことのない職種の参加者やコーティネーターと長く話す体験にも大きく影響を受けた。最終日に聞いた、各々の領域によるプレゼンテーションでは過ごした時間の濃さを感じた。この研修は、単なる５日間の思い出に終わらないと思う。機を見て長野を訪れたいし、これから自分が作る場や仕事には、どこか長野の匂いが混じる気がする。

大司百花（信州大学人文学部生 / 現代限界芸術研究会会長）

特に印象に残ったのは、私道かぴさんの滞在制作作品の鑑賞と、『SUWA× 文楽』の鑑賞です。私道かぴさんの劇は、木曽踊りのシーンで少しずつ踊りの輪ができた時に、私も参加したいと思うと共に、初めて木曽踊りというコンテンツに触れ、誰もが簡単に習得できるコミュニケーションツールがあることに感激しました。『SUWA× 文楽』は、内容の素晴らしさはもちろんですが、終演後に「お若いのに文楽を観に来るだなんて偉いですね」と声をかけてくださった隣席のマダムが印象的でした。文楽に触れる若者が少ないということを体感しているからこそ出てくる言葉に、改めて伝統文化の存続について考える機会をいただいたように感じました。多くのものごとや人々にに触れることができ、貴重な滞在となりました。

岸本麻衣（インタビュアー、プロデューサー）

あれほどアートの呼吸を浴びつづけたのはいつぶりだろうか。美術大学に通っていた当時すらなかったかもしれないと思うほど濃厚な５日間だった。信州を巡りながら岩手で暮らした２年間を思い出し、日本の都市部以外でアートと隣り合って生活するとはどういうことか、あの暮らしがなければわからなかっただろうと感じていた。きっと５日間の感じかたもだいぶ変わっていたはずだ。そしてあらためて「生きることとアートの呼吸」というタイトルの秀逸さを思った。アートの呼吸を浴びるだけではなく、わたしも深く呼吸するひとりとなって、また長野を訪れたい。素敵な滞在研修の機会をいただき、ありがとうございました。

松本奈々子
（パフォーマー・振付家 / チーム・チープロ共同主宰）

長野県下のさまざまな芸術実践の現場に足を運びながら、それらが生まれる過程で編み出されてきた場所や人やものとの関係に（すこしずつ）触れることができたように思います。研修で出会ったみなさんひとりひとりが、わたしはここでそのようにするしかないというような説得力をもっていたのが印象的でした。わたしは長野県には住んでいないけれど、すこしずつ踊りとして関係してゆけたらいいなと、考えています。

ヤマモトミホ（制作）

長野県飯田市の伝統芸能『今田人形』のメンバーが中心の飯田人形浄瑠璃振興会で制作をしています。長野をもっと知り色々な繋がりを作り、活動に結び付けられたらと思い参加しました。
訪問先の皆さんのさまざまな活動や想い、また信州アーツカウンシルの皆さんの考えや熱さに触れることができ、なによりこのプログラムに参加した同志達との縁や一緒に過ごした大切な時間と、人生の宝になることだらけでした。
活動においても応援・ご協力いただける繋がりもでき、見えなかったことが見え、難しく考えすぎていた部分にも気づくことができました。

後藤湧力（信州大学人文学部学生）

コロナウイルスの流行により、「アートをする必要性」というものがもう一度問われる世相の中で、今回の滞在プログラムがその問いに強く答えを与えてくれたような気がしました。たとえどんな時代になってもアートを通した人との繋がりを必要とされる方が存在していて、今回のプログラムは沢山のそうした方々と出会わせていただけた５日間のように感じました。こうした長野県内のアート活動に自分なりの形でこれからも関わっていきたいと思いました。

ラッキーうぶすなレジデンシー

東京に出てきてあっという間に十数年（今は埼玉）。あと少しで地元・大町で生きた時間を追い抜いてしまう。寂しい。自分の活動にもようやく慣れてきたここ数年、東京での活動に疑問を感じていたと同時に、いつか地元にダンスで関わりたいと思っていた。身体に染み込んでいる空気感だったり、記憶とか、そういうものが薄れていく気がしていたのかもしれない。

パフォーミングアーツが盛んとは言いにくい地元にダンスで関わるには何をどうすれば … とぼんやりしていたところ、NOA2021研修プログラムを知り参加した。今回を振り返ると、まず研修プログラムの存在が大きい。自分たちのやり方でその地域で活動する人々に会い、いつの間にか劇場・オルタナティブスペース、そういう箱ものや既存の仕組みに囚われていた自分の頭をがつーんと殴られるような気持ちだった。窮屈さがなく刺激的で、今回の滞在を後押ししてもらえた。

地元はとてもプライベートな場所だし、芸術関係をやっていると公言するのは勇気が必要だった。市役所に打ち合わせに行くと、知り合いが何人もいる状況。気恥ずかしいと思っている中で、更に担当の方がほぼ幼馴染。ここまできたらと開き直る。

そもそもAIRは、その土地外の新しい人が招かれる印象が強いけれど、今回は生まれ育った土地つまりうぶすなレジデンシー。マレビト的ではないけれど、地元以外の生活を経験し、客観的な視点も多少あることに気づいた。よく知っていると思っていたのに、知らなかったことに気づいていく体験は奇妙な感覚だった。幼少期には当たり前すぎた物事が、運ばれてきた文化の名残と、山の土着的なものとが混ざった特有の風習だったり。わたしも、大昔からのそういうものの線上の一点で、その線はこれからもくり返し続いていくのだなぁ。ちょうど同時期に、別のダンス事業でヨーロッパに滞在していたことも合間って、無意識にも自分のルーツを見つめ直すようだった。

幼い頃から利用していた大町名店街のハングリーボックス ユキ。

滞在中、毎日のように遊びに来てくれた近所の商店の方たち。

毎朝、店のシャッターを開け、近所の商店の人たちと軽く立ち話し。とにかくこれが良かった。首都圏では制作期間が始まると稽古場に篭りがちで、ダンス活動と世の中は切り離されているように感じる。商店街の空き店舗であり、幼い頃に利用していた「旧ショーゲツ」を使わせてもらえたこともミラクルで、うぶすなレジデンシーという奇妙な立ち位置をやりやすくしてくれた。作業日はいつでも誰でも入ってOKにしたことも自分に合っていたし、結果的に集客にも繋がったように思う。

劇場には劇場の良さがあるけれど、ダンスに馴染みのない人も身近に感じられる、通りがかりにふらっと観ることができるような、触れやすいことの大事さ。飲食店など日常使いの商店とそうは変わらない立ち位置にダンスがあると思えて精神的に健康だった。

大町のキッズたちにも興味を持ってもらえました。

故郷ってそこにいなくても身体に残っている。不思議。薄れてきてると思っていたけれど、ちゃんと自分の中にあることを再確認できた。県の緩やかで細やかなサポートと市の受け皿があるという最強な状況、更に地域の方々のたくさんの協力と興味を持ってくれたおかげで、ここには書き切れないほどとにかくラッキーでミラクルの連続。

大切だと思っていることは、自分がその場に行き、そこに居合わせてもらわないと成立しないものだった。その土地に暮らす人に観てもらうということをしっかりと意識し続けたい。地元大町と、そうでない土地とも、有機的に自分のできることを考えながら長い目で関わっていけたらと思えた一年だった。

NOA 大町市滞在アーティスト 横山彰乃

ダンサー / 振付家

長野県大町市出身。国内外での舞台活動と並行し、演奏家とのパフォーマンスや、MV等への振付を行う。ダンスカンパニーlal banshees を立ち上げる（2016-）情景を意識した空間作りと、感覚に着目し音と繋がりのある緻密な振付で、性別に囚われない中性的なダンスを創作。見落として通り過ぎてしまうような現実をファンタジックに切り取り、そして現実に戻す音楽的ダンスを体現する。第16回日本ダンスフォーラム賞等受賞。

2020-2023年度セゾン文化財団セゾン・フェロー I

アーティストは山村文化を照らし出す光

NOA（NAGANO ORGANIC AIR）という言葉を初めて聞いた時、田舎で有機栽培の野菜を育て、新鮮な空気を吸う活動？くらいの認識だった。コーディネーターの野村政之さんから「AIR＝Artist In Residenceという活動は、アーティストが地域に滞在して、地域の方と有機的（ORGANIC）に関わりながら、創作活動をするんです。そのホスト役をしていただけませんか。」と依頼を受けたときも、正直、観光案内役をするくらいの捉え方でしかなかった。

2021年４月に、俳優で劇作家の山田百次さんと、NOA運営チームの方々が初めて新野にやってきた。深夜まで制作会議（飲み会？）を重ね、徐々に阿南チームの心がまとまっていった。同年６月には、山田百次さんがここ阿南町新野に伝わる伝統芸能「新野の盆踊り」を題材に短編戯曲『新野物語』を書き上げ、それを新野で上演することが決まった。

ここからは一気に進んでいく。山田百次さんが劇作・演出・出演を担うとともに、「新野の盆踊り」の音頭取りである金田渚さん、売木村在住の俳優である小原華さんを出演に迎えることとなった。また、私は方言指導を受け持った。百次さんの戯曲には、「新野の盆踊り」に流れる死生観が見事に表現されていた。そこに向かって細かな演出の修正を繰り返した。地元の習慣や方言の言い回しなどの私の指摘に、百次さんは「それ。いいね。それでいきましょう。」と気持ちよく受け入れてくださり、演劇づくりに関わる楽しさを感じることができた。

そして迎えた2021年11月、新野まるはち旅館さんでの上演会。方言の部分に地元のおばあちゃんたちが大笑い。最後のシーンでは涙を流している方もいた。お客さんからは「当たり前に毎年やってきた盆踊りだけど、改めてその意味が分かった。」「盆踊りって祖先の霊を弔う意味があったんですね。」などの感想が寄せられた。

翌年2022年７月のツアー公演では、瑞光院本堂での新野公演と、うるぎHalo! - 岡田屋 - での売木公演を行った。両公演ではスタッフとして地元の仲間も参加した。

新野公演の出演者とスタッフ。作品にぴったりの瑞光院本堂にて（写真：金田諦）

『新野物語』の世界そのままの両会場では、多くの地元の皆さんにご覧いただくことができた。そして同年12月、銀座ＮＡＧＡＮＯでの移住ＰＲイベントを信州アーツカウンシルとの共催で実施。来場されたアーティストの方や移住に関心のある方々の反応に手応えを感じうれしくなった。

私は百次さんの描いた『新野物語』は、山村文化を照らし出す「光」だと感じている。毎年当たり前に行われてきた「新野の盆踊り」。地元の住民もその死生観をはっきりと意識することなく約500年続けてきたのではないだろうか。

時を同じくして2022年11月30日。「新野の盆踊り」は全国の「風流踊り」の一つとしてユネスコ無形文化遺産に登録された。このことは、先人から受け継いだ神仏とともに生きる暮らしが、現代においてはいかに稀有であり、その象徴としての「新野の盆踊り」は人類の宝であると、ユネスコによって照らし出されたのである。今後、阿南町新野で暮らしてみたい方、創作活動をしてみたいアーティストの方に、空き家の提供、イベント企画などの移住支援を行い、コミュニティーの活性化にアートを取り入れて、移住定住人口の増加と関係人口の創出をしていきたいと考えている。

この度、このような機会をいただいた信州アーツカウンシルの津村卓さん、野村政之さん、藤澤智徳さん、アシスタント・コーディネーターの加藤亜弓さんに感謝するとともに、すばらしい作品を創作していただいた山田百次さん、出演の小原華さん、金田渚さんに心から感謝したい。

NOA 阿南町ホスト 金田信夫（新野だら実行委員会）

新野だら実行委員会は、“南信州の山村にアートの風を”をテーマに2019年から活動。阿南町新野地区の瑞光院にてアートイベントを開催。切り絵パフォーマーのチャンキー松本、影絵芝居の物語屋、ビオラダガンバ奏者の田中聖、アフリカンダンスのサブニュマ、二人芝居 Tea Arrow など新野に所縁のある方を中心に企画。カフェや菓子店も合わせて出店し、地元や近隣の皆さんが楽しめるイベントを企画し好評を得ている。

企画制作	信州アーツカウンシル (一般財団法人長野県文化振興事業団) [津村卓、峯村高広、宮本隆希、保谷有美、野村政之、伊藤羊子、佐久間圭子、藤澤智徳]
アシスタント・コーディネーター	一般社団法人シアター & アーツうえだ (加藤亜弓、村上梓)、鈴木彩華、前田斜め、水橋絵美
主催	信州アーツカウンシル (一般財団法人長野県文化振興事業団)、長野県
	令和四年度 文化庁 文化芸術創造拠点形成事業 文化庁
【茅野地域】	
主催	茅野市民館指定管理者 株式会社地域文化創造
共催	信州アーツカウンシル (一般財団法人長野県文化振興事業団)、長野県
助成	一般財団法人地域創造
【安曇野地域】	
主催	安曇野市教育委員会、信州アーツカウンシル (一般財団法人長野県文化振興事業団)、長野県
ロゴデザイン	アイコ美術工藝社
WEB デザイン	0px.style（本藤雅彦）
アーティスト	行橋智彦 [旅する服屋さん メイドイン]（栄村）、額田大志（長野市）、蓮沼執太（小海町）、 ...1[アマリイチ]（安曇野市）、横山彰乃（大町市）、私道かぴ（木曽郡）、舒達（木曽郡）、 森下真樹（茅野市）、石川直樹（茅野市）、山田百次（阿南町）
ホスト	栄村公民館（栄村）、R-DEPOT キャンププロジェクト（長野市）、小海町高原美術館（小海町）、 安曇野市教育委員会（安曇野市）、信濃大町アーティスト・イン・レジデンス（大町市）、 木曽 AIR ネットワーク（木曽郡）、茅野市民館（茅野市）、新野だら実行委員会（阿南町）

NAGANO ORGANIC AIR2022 DOCUMENT BOOK

2023 年 3 月 31 日発行

企画・監修	信州アーツカウンシル (一般財団法人長野県文化振興事業団)
編集・テキスト	野村政之、佐久間圭子、藤澤智徳
デザイン	ACP+DESIGN
発行	一般財団法人長野県文化振興事業団 アーツカウンシル推進室 (長野県長野市若里 1 ー 1 ー 4　県立長野図書館 1 階) noa.nagano.jp

© Shinshu Arts Council 2023 Printed in Japan